

親鸞筆『教行信証』の漢音声調

A Study on the Accents of *Kan-on* (漢音) in Shinran's *Kyogyoshinsho*

佐々木

Isamu SASAKI

勇

Some descriptive research has been conducted on kanji pronunciation based on several Buddhist texts left by Shinran. The present study, as part of a series of studies on kanji pronunciation in Shinran's texts, analyses the kanji in the *Kyogyoshinsho* text of the Higashi Hongan-ji Temple, which is said to have been written by Shinran in the Bunreki era (1234-35) and revised and expanded in his later years. Most of the kanji used in the *Kyogyoshinsho* text were pronounced in *kan-on* (梵音), one of the Chinese pronunciation systems adopted in Japan for the reading of Chinese classics.

From the analysis, the following characteristics of the *kan-on* used in the *Kyogyoshinsho* text have been found:

1. The newer accent of the Japanese *kan-on* has been adopted.
2. Changes of the accents have been influenced by the accents on the previous characters.
3. *Hyoshokai* (falling accents) and *kyosho* (rising accents) have appeared mostly on the head of the words.

一、本稿の目的

親鸞は、自筆本に丁寧に漢字の読みを注し、意味を記している。これは、

親鸞の布教態度によるものである。この音注・義注から当時の日本語の一面を知ることができる。

本稿の筆者は、これまで親鸞遺文に基づく日本漢字音の記述的な研究を行ってきた⁽¹⁾。本稿も、その一環として、漢音の声調についての整理と分

析を行なうものである。

二、対象資料

親鸞遺文を調査した結果、『教行信証』に比較的多くの漢音が見られることがわかった。親鸞筆『教行信証』（東本願寺蔵）は、文暦（一二三四）一（二三五）頃の書写で、その後晩年まで自ら補訂を加えたと推定されている。だが、本文に加えられた訓点の加点の時期を、その一について特定することは困難である。すべて自筆と見られるため、書写時期から没年（一二六三）までの加点であることになる。

三、漢音の認定

『教行信証』には、音読されたと思われるが音注はない語が多い。しかし、全く注が無い字は、本稿の調査の対象にならない。すなわち、親鸞の訓点のみによって、漢音・呉音の判定をする。その若干例を示す。

「入」 入シテ（入濁懸洛シテ）（六末93）

入シテ（入綴道平濁）（六末84） 転平入入綴（四34） 撰入綴入入綴

（六本45） 通去入入綴（六本18） など

最初の例は、漢音「ジフ」を示している。それ以外は、右に挙げた例を含み全十二例が濁声点ではなく、呉音「ニフ」を示している。親鸞は、いわゆる清濁をかなり厳密に加点したからである。³⁾

「外」 外去（去濁）人平濁（三二154）

外平濁道平濁（六末54・59・84） 外平濁己平（四43） 外平濁
樂（四48） 外平濁甥平（六末56・57） など

仮名音注が無く声点が加点されている例（右に挙げた例を含み全十五例）は、すべて平声濁の加点である。「外」字は、呉音が加点された親鸞の『観無量壽経註』『阿弥陀経註』『三帖和讃』などでは、全例平声点である。『三帖和讃』から仮名音注加点例を抜き出せば、左記のようである。

外平濁（高僧87） 外平濁儀平濁（高僧105）

保延本『法華経单字』・観智院本『類聚名義抄』和音からも、呉音グエ・平声であることが知られる。一方の漢音は、興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』・唐招提寺蔵『孔雀経音義』などから、グワイ・去声であったことがわかる。

右のように一字一字の漢呉音形・声調を当時の資料によって認定し、本資料で仮名音注および声点の加点がある漢字のすべてについて調査した。その結果、漢音と認定した漢字の延べ数は次のとおりである。

声点・仮名とも加点された字 448字

声点のみ加点された字 622字

仮名のみ加点された字 48字

漢呉音形・声調の認定に未だ問題が残る。本稿の以下の調査・考察は、この範囲内のものである。

四、本資料の漢音声調

1、「廣韻」声調・声母の清濁との対応関係

本資料で、漢音と認定した例の内、声点加点例一〇七二例を、「廣韻」の

表1 教行信証の漢音声調

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
平	83	35	97	126	5	2	20	12	12	1	8	5					406
平輕	80	10	8	5	2	4	1	1	4								115
上	20	2	17	5	44	5	9	50	11	3	2	21				3	192
去	8		21	3	7	2	55	3	87	16	39	33					274
入輕													8		14	13	33
入													8	1	20	21	50

(数字は、延べ例数である。空欄は、用例が無いことを示す。以下同じ。)

体系と比較すると、表1のようになる。

本資料の漢音声調は、日本漢音の中心的な声調体系である六声体系で加
点されている。しかし、六声体系と中国中古音声調の対応の原則に合わな
い点がある。これは、他の十三世紀の漢音資料でも同様である。⁽⁴⁾

したがって、本資料の漢音声調は、当時の漢音声調資料の一つとして有
効であるといえる。本資料の声点は、入声には、「急」「緩」を区別するも
のであり、⁽⁵⁾清濁を良く区別する。今後、漢字音・漢語音の資料として、さ
らに活用されるべきものと考ええる。

2、本資料が反映する日本漢音

本資料は、上声全濁字が去声化した割合が高い。

沼本克明は、中国で起こった声調変化である上声全濁字の去声化が、日
本漢音に段階的に反映されていることを説いた。⁽⁶⁾これに従えば、本資料は、
日本漢音のうちの最も新しい層に属することになる。沼本によれば、この
新層には、天台宗と紀伝道伝承音また真言宗の文鏡秘府論の漢音が属する。
本資料が、この層に属することは、親鸞が若い日に比叡山で修行したこと
と関係するのであろうか。⁽⁷⁾

3、声調の国語化の様相

院政期以降の漢音の分析には、日本語の音節数・語の観点を導入しなけ
ればならない。⁽⁸⁾そこで、以下にその観点から分析を行なう。

a、音節数の観点からの分析

本資料の加点例を一音節・二音節に分け、声調ごとに例を数えてみる(一

表2

声点	廣韻	平 声				上 声				去 声				入 声				計
		清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
平	一	17	4	7	16	1		7	3	4		2	3					64
	二	66	31	90	110	4	2	13	9	8	1	6	2					342
平輕	一	8			1													9
	二	72	10	8	4	2	4	1	1	4								106
上	一	10	1	6	2	31	2	9	26	5	3	2	21				2	120
	二	10	1	11	3	13	3		24	6							1	72
去	一			3		5	1	1		7	1	2	3					23
	二	8		18	3	2	1	54	3	80	15	37	30					251
入輕	一													5		3	3	11
	二													3		11	10	24
入	一															2	4	6
	二													8	1	18	17	44

佐々木 勇

音節・二音節の認定などは、注8論文と同様である。

結果の数を表に示したものが、表2である。表1を一音節・二音節に分ける形で示した。全体の一音節・二音節の用例数は、二三三対八三九で約1対4である。

この表2から、つぎの点に気づかれる。

- ① 平声軽が、二音節字に多い。
- ② 上声が、一音節字に多い。
- ③ 去声が、二音節字に多い。

なお、入声・入声軽については、全体数が少ないため、傾向の指摘は保留したい。

①は、平声軽の下降調アクセントを実現するには、二音節分の長さが必要であったことの反映であろう。

②は、和語・呉音に当時一般的であった「一音節去声字の上声化」を反映するものと解釈される。漢音資料の中でも同様な現象が見られることが、岩崎文庫本「蒙求」について指摘されている。⁽⁹⁾

③は、②の現象による結果的な数である。

b、語頭・語頭以外の観点からの分析

本資料の加用例を語頭・語頭以外に分け、声調ごとに例を数えてみる。語の認定は、親鸞の訓点に基づき、不明の点は、「親鸞」(日本思想大系11、岩波書店、一九七一年)の訓読に依った。

結果の数を表に示したものが、表3である。前表2と同様、表1を語頭・語頭以外に分ける形で示した。全体の語頭・語頭以外の用例数は、五八七対四八五で約5.5対4.5である。

表3

廣韻 声点	平 声				上 声				去 声				入 声				計	
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁		
平	頭	36	15	54	61	3	1	3	3	3	1	3	2					185
	中	47	20	43	65	2	1	17	9	9		5	3					221
平輕	頭	56	6	5	3	2	4	1	1	3								81
	中	24	4	3	2					1								34
上	頭	12	1	6	2	26	4	3	26	6		2	7				2	97
	中	8	1	11	3	18	1	6	24	5	3		14				1	95
去	頭	8		17	1	6	1	33	2	55	13	34	17					187
	中			4	2	1	1	22	1	32	3	5	16					87
入輕	頭													5		3	6	14
	中													3		11	7	21
入	頭													6	1	8	8	23
	中													2		12	13	27

この表3から、つぎの点に気づかれる。

- ① 平声輕が、語頭に多い。
- ② 去声が、語頭に多い。
- ③ 入声輕が、語頭以外に多い。

①は、金沢文庫本「群書治要」でも指摘された点である。語頭以外では、本来の平声輕が、直上の字の声調の影響によって、平声あるいは他の声調に変化したことが考えられる。

②は、和語・吳音に見られる「一音節去声字の上声化」の過程の現象と、直上の声調の影響による声調変化の結果と同様の状態と考えられる。⁽¹⁰⁾これが、漢音資料にもあることは、注9論文で説かれている。

③は、直上字の声調の影響によるのであろう。

c、上下の字の声調の影響

右で、語頭とそれ以外とで、差が見られるものがあつた。その理由の一つとして考えられるのが、直上字・直下字の声調の影響であらう。

そこで、本資料の声点加點例の上下字の声調を見てみる。上下の字の声調の認定は、当該例における加點例に依る。その用例に声点が加點されていない場合は、算入しない。これは、同一字でも出現箇所によって、声調が異なるためである。

まず、上接字の声調から見る。用例数を表にすると表4となる。

例数が少なく傾向を見だしにくいのが、表4から次の点が指摘できる。

- ① 平声輕の上接字に、去声の割合が高い。
- ② 上声の上接字に、上声・去声の割合が高い。
- ③ 去声の上接字は、上声・去声の割合が低い。

表5 下接字の声調

上\該	平	平軽	上	去	入軽	入
平	54	12	25	41	8	9
平軽	41	3	5	3	3	3
上	32	1	20	5	4	9
去	55	8	23	15	9	13
入軽	6	1	4	4	0	0
入	10	0	3	0	0	3
計	198	25	80	65	24	37

(横は下接字の声調、縦は当該字の声調)

表4 上接字の声調

上\該	平	平軽	上	去	入軽	入
平	52	28	39	58	11	15
平軽	11	4	4	11	2	0
上	21	4	18	29	4	6
去	43	4	8	17	1	6
入軽	10	3	3	4	0	1
入	7	2	7	5	0	3
計	144	45	79	124	18	30

(横は下接字の声調、縦は当該字の声調)

佐々木 勇

つぎに、下接字の声調を整理すると、表5となる。

これも、傾向を見いだしにくいですが、次の点が指摘できる。

④平声の下接字に、去声の割合が高い。

⑤平声軽の下接字に、平声の割合が高い。

⑥上声の下接字に、上声の割合がやや高い。

⑦去声の下接字に、入声軽の割合が高い。

右の①⑦をアクセントの高低でしめすと、次のような型が多いことになる(平声を○、平声軽●、上声●●、去声○●、入声○△、入声軽●▲とする)。

- ① ○●●●●●
- ② ●●●●●●
- ③ ●●●●●●
- ④ ○○●●●●
- ⑤ ●●●●●●
- ⑥ ●●●●●●
- ⑦ ●●●●●●

いずれもアクセントの谷の無い型である。

漢字音の声調は、中国語の声調を反映するため、一語の中にアクセントの谷が存する不自然なものがあった。たとえば、去声の字が続けば、●●●●●●という語アクセントができあがる。本資料の中でその例を示せば、次のようなものである。

太(去)上(去) (六末62) 大(去)道(去) (六末81) 変(去)化(去) (六末83)

ところが、語頭で去声例を有する本来去声の漢字が、上声になったと思われる次のような例が有る。

含(去)氣(上) (六末73) 上(去)古(上) (六末61) 柱(去)史(上) (六末83)

②③⑥は、この連音による声調変化の結果であると説明できる。

①は、語頭以外には少なかった平声軽が、去声のような高く終わるアクセントの次には実現しやすかったことを示すものであろう。⑦も同様に考

えられる。

④は、語頭以外には少なかった去声が、低いアクセントの次には実現しやすかったことを示すものであろう。⑤も下降アクセントに続く低アクセントが自然であったためと考えられる。

これらの中には、呉音について既に指摘されている声調変化がある(②③⑥)。本資料でもその影響が及んでいたと考えられる。また、それ以外の変化も漢音声調の国語化の一つとして捉えられる。

本稿の対象とした漢音について、右の傾向が見いだされたことは、重要である。なぜならば、漢音にはこのような声調変化は見られないと従来説かれていたからである。⁽¹¹⁾

五、まとめ

以上の検討によって、『教行信証』の漢音声調について、次の点が判明した。

- ① 日本漢音の内、新しい声調を反映している。
 - ② 平声軽・去声は、二音節字に多い。
 - ③ 上声は、一音節字に多い。
 - ④ 平声軽・去声は、語頭に多い。
 - ⑤ 入声軽は、語頭以外に多い。
 - ⑥ 直上・直下の字の声調の影響による声調の変化が見られる。
- これらのことから、遅くとも十三世紀中頃には、日本漢音の声調が国語の影響を受けていたことがわかる。日本語の音節数によって差が出る現象

が、中国語の声調変化の反映とは考えられないからである。ただし、声調全体を見れば、本資料は、いまだ大部分が漢音の体系に一致している。漢音が和語・呉音のアクセントの影響を蒙って、和語・呉音と同様の国語アクセント化を一部で起こしているのである。

注

- (1) 「親鸞筆『阿弥陀経』「観無量壽経」の漢字音について」(比治山大学現代文化学部紀要) 創刊号、一九九五年三月) など。
- (2) 親鸞聖人七百回御遠忌記念の複製(一九五七年刊) 赤松俊秀氏解説。
- (3) 注(1) 論文、参照。
- (4) 柏谷嘉弘「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(国語学) 第六一輯、佐々木勇「声点」「△」の機能——「辨正論」保安四年点について——(かがみ) 第三十一号。一九九四年三月、同注(7)(8) 論文、参照。
- (5) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(東洋大学大学院紀要) 第二輯、一九六五年九月)。
- (6) 「平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究」(一九八二年三月。武蔵野書院) 第二部第五章。
- (7) いま、親鸞がどのような系統の漢音をいつ習得したのかは明らかにしがたいが、この時期には、仏家の漢音は、宗派による差がそれほどなくなっていたことも考えられる。佐々木勇「十一〜十三世紀における法相宗の漢音」(鎌倉時代語研究) 第十輯。一九九五年八月) 参照。
- (8) 佐々木勇「日本漢音の軽声減少について——漢音の国語化の一側面——」(国語国文) 第六十四巻第十号。一九九五年十月) 参照。
- (9) 佐々木勇「日本漢音に於ける声調変化——岩崎文庫本『蒙求』を中心に——」(新大國語) 第十四号。一九八八年三月) 参照。
- (10) 沼本克明「毘富羅声の機能」(国語学) 第八四輯、佐々木勇「呉音一音節去声字の上声化の過程」(鎌倉時代語研究) 第十輯、一九八七年五月)、参照。
- (11) 注(6) 著書、四九頁。

佐々木 勇

キーワード：教行信証、漢音、声調、声調変化、国語化

(言語文化学科 日本語文化専攻)
(一九九五・一〇・三一受理)